論　文

大学生と恋愛
－恋愛に対する積極性の促進要因と阻害要因に着目して－

福岡県立大学　中　村　晋　介

要　旨

現代の日本では、ロマンティック・ラブ・イデオロギーが横溢する一方で、「若者の恋愛離れ」に社会学的、あるいは心理学的な関心が寄せられている。ただし、このテーマに関する社会科学的な言説で実証的なデータに基づいたものは決して多くない。

この問題意識の上で、筆者は2013年度秋に、大学生1093名を対象とする量的調査を行い、大学生の恋愛に対する実践や、積極性について検討を加えた。主な知見は以下2点である。1）大学生は，大学内の友人関係や趣味において、少数の恋人に積極的な群と，多数の恋愛に消極的な群に二極分化していた。2）恋愛に対する大学生の積極性は，彼／彼女が中学校や高等学校でどのような生徒であったのかに大きく影響を受けていた。これらは、既に指摘されてきた「若者のキャラ化」や、「スクールカースト」現象の帰結と考えることが可能だろう。

キーワード：恋愛への積極性、若者のキャラ化、スクールカースト

University Students and Romantic Relationships: Focusing on the Effective and Obstructive Factors of Positivity in Romantic Relationships

Fukuoka Prefectural University　*NAKAMURA Shinsuke*

Summary

In Japan, it came to be sociological/psychological issue that many young people has little positivity of romantic relationships.

Based on this conscious, the author conducted the qualitative survey of university students in autumn 2013. Though a statistical analyses (Cross tabulation, Factor analysis, ANOVA, Multiple Correspondence Analysis, and so on) the author was able to gain several findings. The author thinks that the following two findings were very important.

1) University students were divided into two group. Gr.1's members were positive to the romantic relationships. Gr.2's members were negative to these ones. Though there were many differentiation among these groups' member, the differentiation of their friend relationship and hobbies were remarkable.

2) The position of the middle school cliques seriously effects university students' positivity / negativity of romantic relationships.

Finally, the author argued that these findings must be the inevitable consequence of the sociological issue which became a hot topic in Japan: "characterization of youth" and "school-castes".

Keywords: positivity of romantic relationships, characterization, school cliques

1．本稿の背景と問題意識

一般的に、青年期においては、異性への関心や、異性と接近／接触したいという欲求が高まるとともに、特定の異性と継続的な精神的・身体的に親密な関係を取り結ぶことを希求すると主張されてきた［e.g. 坂田 1986］。本稿では、ひとまず「恋愛（関係）」を、このような関係であり、その特定の異性を「恋人」、このような関係を構築し、「恋人」を獲得したいという意識を「恋愛への積極性」と定義しよう（両性愛や同性愛を捨象した理由については、本節末で言及する）。

しかし、現在の日本では、あちこちで「若者の恋愛離れ」に関する言説、本稿で言う「恋愛への積極性」の低下に関する言説が飛び交っている。2010年に公開された「第14回出生動向基本調査」（以下「基本調査14」と略）では、「交際している異性はいない」と回答した未婚男性は61.4％（2005年度調査に比べ9.2％増）、未婚女性は49.5％（2005年度調査に比べて4.8％増）であった。さらに、この問いに「交際している異性はいない」と回答した人に対し、「異性との交際を望んでいるか」と問いかけたところ、肯定的な回答は、（交際している異性がいない）男性の53.1％、女性の51.9％に過ぎなかった［国立社会保障・人口問題研究所 2010］。

2008年頃から「草食（系）男子」「非モテ系」「恋愛カースト」といった言葉が急速に広まっていることも、このような時代に即した現象だと考えられる。これらの単語を巷間に広めた著作（主として一般書）のほぼ全てが、現在恋人を持たない人びとを対象に、「恋人の見つけ方を伝授する」体裁をとってきたからだ［e.g. 深澤 2008、森岡 2008、犬山・峰 2013］。

この状況がなぜ、社会病理学的に見て問題とされるべきか。まず前提となるのは、「基本調査14」では「結婚するつもり」と考えている日本人が圧倒的多数であることだ。同調査では、「一生結婚するつもりはない」と回答した男性は全体の9.4％、女性は6.8％にとどまっていた。むしろ、「ある程度の年齢までには結婚するつもり」と答えた女性未婚者は58.4％（2005年度調査に比べて8.9％増）、男性未婚者は51.9％（2005年度調査に比べて5.0％増）と増加していた。くわえて、同調査は、現代の日本における「結婚」の88％が、いわゆる「恋愛結婚」だとの結果も出されている［国立社会保障・人口問題研究所 2011］。これは、「恋人を自由に選択して恋愛関係に陥り、恋愛の頂点として結婚する」ロマンティック・ラブ・イデオロギーを領有する者が多いにもかかわらず［谷本 2007］、何らかの社会的な要因によって、彼／彼女らの欲求充足が達成できない状況が成立しつつあることを意味している。また、特に若い世代における、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの過剰な横溢が、一部の若者――具体的には、「恋人」を作ることができなかった男女――を精神的に追い込み、アノミー的状況や、社会からの孤立と、それに伴う失意や無力感を引き起こしていることも指摘されている。たとえば、大学生を対象とした研究を続けている若尾良徳らは、2000年代以降の日本社会で、「恋愛ポジティブ幻想」（「恋人がいる人」は「恋人がいない人」に比べ、各種のポジティブな特性を持つと――それが事実かどうかはさておき――他者から認識され、自己もそう認識してしまうこと）や「恋愛ネガティブ幻想」（「恋人がいない人」は、各種のネガティブな特性を持つと他者から認識され、自分自身もそのように感じてしまうこと）を明らかにした［若尾 2003］。その後、2004年から2013年にかけて、若尾らは

「恋愛経験がない人」「性交経験がない人」へのイメージ調査を実施し、こういった者が「純粋でまじめではあるが、対人能力がや動機付けが低く、未熟で不安定であるとのイメージを抱かれる」、「異性交際経験は人物評価と深く関わっており、異性交際から疎外された若者（に対して）は偏見やネガティブなステレオタイプが向けられる」との知見を獲得している［若尾 2014：67］。

こういった状況が発生している以上、今後、特に恋愛から疎外された若者グループを中心に、何らかの病理的状況が発生する可能性が高い。この観点から、筆者は「若者の恋愛離れ」の実態について、自らが実施した量的調査をもとに分析を加えていく。繰り返しになるが、「基本調査14」以来、「草食系男子」「非モテ」「恋愛カースト」といった形で、若い世代が恋愛に積極的な少数派グループと、消極的な多数派グループに二極分化している実態と、その原因についての議論がまきおこった。ただし、筆者の知る限り、こういった議論の中には、その実証性において疑問があるものが少なくない。本稿では、計量調査の技法や分析結果をもとに、「恋愛離れ」の実態を、データに基づいて解明することを試みる。具体的には、筆者が2013年度に実施した調査の結果をもとに、「恋愛に積極的」な若者と、「恋愛に消極的」な若者がいかに分離するかを、「恋愛への積極性」への促進要因と阻害要因として洗い出していく(2)。「恋愛への積極性」が、発達心理学的、青年心理学的にみて、かなり普遍的に観察される現象であるならば、現代の若者に見られる積極性の多寡は、促進要因（＝積極性を高める要因）と、阻害要因（＝積極性を低める要因）との連関図式によって説明できるはずである。「恋愛に消極的」な若者とは、阻害要因が促進要因を上回っている者であり、積極的な若者はその逆だと判定できよう。

なお、冒頭で述べたように、筆者は検討の対象である「恋愛」を、いわゆる「異性愛」に限定した。社会病理学的な観点からすれば、LGBTの人びとや、異性愛や両性愛の問題を捨象することは望ましくないかも知れない。しかし、本稿で使用した量的調査という方法の限界、「基本調査14」など、本稿が参照した過去の「恋愛」に関する調査や言説が、異性愛者のみを対象としたものであった。よって、それらとの連続性を企図する本稿もまた、異性愛者に対象を限定した(3)。

2．分析

(1) 調査の概要

筆者は2013年秋に、恋愛に対する大学生の認識や実践に関する量的調査を実施した。国立大学2校、公立大学1校、私立大学2校で、自記式の調査票を講義時間後の休憩時間に配布・回収した（1200票を配布し、1093票の有効票を得た。事前に調査の趣旨と個人情報の保護について説明し、同意を得られた者にのみ調査票を配布した）。

回答者の性別は、男性341名（31.2％）、女性752名（68.8％）、専攻は理系171（15.6％）、文系886（81.1％）、DK/NA 36（3.2％）となっていた。調査票には、フェイスシートにくわえて、回答者の趣味、友人関係、恋人の有無、恋愛への積極性、恋愛観、恋愛をしない理由、自己評価

(容姿・コミュニケーションスキル)、通っている大学への評価、過去の恋愛に対する評価、中学生時代の行動や意識（人間関係・趣味・異性関係・恋愛観）などを配置した。

「基本調査14」の結果と本調査の結果を比較する。本調査に回答してくれた大学生のうち、「現在、恋人がいる」と答えた者の比率は、全体の30.9％（男子学生33.7％、女子学生29.6％）に過ぎず、いずれも「基本調査14」の比率を下回っていた。実家の家庭環境や、所有する文化資本が似通っている同世代の異性に出会う確率が高く、自由に使える時間が多いはずの大学生（特に女子学生）において、恋人を持つ者の比率が下がっていた点はいささか意外であった。なお、恋人の有無と、通っている大学の種別（国立／公立／私立)、専攻、可処分所得、居住形態、同性／異性の兄弟姉妹の有無といった属性変数との間には、全て連関が見られなかった（性別ごとの集計／分析も行ったが、有意差は特にみられなかった)。

全回答者より、「現在、恋人がいない」と答えた者（747名）のみを抽出し、「今後、恋人作りや異性との交流を積極的にしていきたいか」を質問し、表-1を得た。「強くそう思う」「ややそう思う」と回答した者の比率は、該当者の65.1%、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した者の比率は、同じく44.9%であった。恋愛に対する積極性については、「基本調査14」の回答者たちよりも、今回の調査対象者たる大学生において、恋愛に積極的な者の比率がやや高いようである。以後、今回の調査対象者を「恋人保有群」（調査時点において恋人がいた者：334名、全体の30.9％)、「恋愛積極群」（調査時点において、恋人を持っていないが、表-1で「強くそう思う」「ややそう思う」と回答した者：378名、全体の34.6％、恋人がいない者の65.1％)、「恋愛消極群」（調査時点において、恋人を持っていないが、表-1で「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した者：308名、全体の28.2％、恋人がいない者の44.9％）の3群に分けて、それぞれの特性を見ていく[1]。まずは、「恋愛積極群」と「恋愛消極群」との差異について見ていこう。

表-1：恋愛への積極性

恋愛への積極性→ 性　別↓	強く そう思う	やや そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない	合　計
男性（n=203）	11.8%	38.9%	40.9%	8.4%	100.0%
女性（n=497）	12.1%	44.9%	35.2%	7.8%	100.0%
全体（n=700）	12.0%	43.1%	36.9%	8.0%	100.0%

有意差なし

(2)「恋愛への積極性」の促進要因と阻害要因

今回使用した調査票には、友人関係、趣味、過去の恋愛経験、恋愛についての価値評価、自己評価といった項目について多数の設問を配置した。クロス表／χ^2検定を用いて、「恋愛積極群」と「恋愛消極群」との間で、これら設問群への回答に差異があるかを分析していったところ、以下の項目で有意差が現れた（クロス表は省略)。

・恋愛積極群では、「同性の親友がいる」者が増える（$p<.001$)。

・恋愛積極群では、「恋人を持つ友人がいる」傾向が高まる（$p=.011$)。

・恋愛積極群には、過去に恋愛経験（片思いを含む）を持つ者が多い（p<.001）。
・恋愛消極群では、アニメやゲームなど「おたく的」趣味に詳しい者が増える（p<.001）。
・恋愛積極群では「１人で自分の趣味を追求するより、友だちと遊ぶ方が好き」な者が増える（p<.001）。
・恋愛消極群では、「独身を貫くのも悪くない」と考える者が増える（p<.001）。
・恋愛消極群では、「自分は恋愛対象として見てもらいにくいタイプの人間だ」と考える者が増える（86.2%、ただし恋愛積極群でも77.4%に達していた）（p<.001）。
・恋愛消極群では、「恋人がいる人をうらやましく思わない」者が増える（p<.001）。

恋愛積極群の学生は、現在（＝調査票に記入した時点）は恋人を持っていないが、過去に恋愛経験を持っているし、大学生活において、同じ恋愛積極群や恋人保有群と交流する傾向を持っていた。一方、恋人をもっておらず、恋愛消極群の学生は、その過去においても恋愛経験を持たず、同じ恋愛消極群と交流する傾向が高い。また、両者は「アニメやゲームなど、『おたく』的趣味」への親和度」や「恋愛や結婚に対する価値観」「どのような趣味や遊びを好むか」という点においても二極分化していた。この分化が、恋愛積極群においては、恋愛への積極性に対する促進要因として機能し、恋愛消極群においては阻害要因として機能していることが推察される。恋愛積極群が同じ恋愛積極群の学生、あるいは恋人保有群の学生と、集団で遊ぶ形で交流する時、彼／彼女たちが恋人候補となりえる異性と出会うチャンスは高まる。彼／彼女には、同じく恋人を探している異性を紹介してくれる同性の友人も多いだろうし、必然的に異性とのコミュニケーションスキルも向上する。一方の恋愛消極群は、1人で趣味を追求することが多く、恋人がいることを特にうらやましくも感じないため、ますます異性との出会いの機会を失っていき、異性に対するコミュニケーションスキルを停滞、あるいは鈍化させていく。

今回の調査では、「青年期における過去のとらえ方」に着目した石川茜恵［2013］の研究、及び「恋愛に消極的」な大学生の中に、「過去の恋愛における失敗」を引きずっている者がいることを指摘した髙坂康雅［2013］の研究に準拠し、1)「過去の恋愛への連続的なとらえ」（過去の恋愛は自分を成長させてくれた）、2)「過去の恋愛への否定的態度」（過去の恋愛に後悔していることが多い、過去の恋愛を思い出したくない）、3)「過去の恋愛への受容的態度」（過去の恋愛に感謝している、過去の恋愛における過ちを忘れないようにしている）、4)「過去の恋愛への割り切り態度」（過去は過去と割り切るようにしている）と、恋愛への積極性との連関をクロス表／χ^2検定で測定していった（表は省略）。

その結果、「割り切り態度」以外の全てにおいて有意な連関が現れた。中学生時代に恋愛／片思いの経験を持っていた者、実際に異性と交際した経験があり、その経験に「割り切り」以外の何らかの意味づけを行っている者は、大学生である現時点において、恋人保有群か恋愛積極群に所属していた。中学生時代における恋愛感情の発現と、それに対する反省的な視点が、恋愛に対する積極性の促進要因となっているようである。

次に、「異性の友人」の数と、恋愛への積極性について検討したところ、「異性の友人がほどほどにいる」ことが、積極性の阻害要因となっていることがうかがえた。表-2によれば、異性の友

人が特に多い（異性の友人が多い＝あてはまる）グループと、異性の友人が特に少ない（異性の友人が多い＝あてはまらない）グループで恋愛積極群が増え、その中間（ややあてはまらない、ややあてはまる）で恋愛消極群が増える傾向がある。

表-2：異性の友人数×恋愛への積極性

恋愛への積極性→ 異性の友人の多さ↓	強く そう思う	やや そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない	合　計
あてはまらない (n=83)	17.2%	40.9%	28.0%	14.0%	100.0%
あまりあてはまらない (n=227)	8.4%	46.3%	41.4%	4.0%	100.0%
ややあてはまる (n=276)	10.5%	44.9%	36.6%	8.0%	100.0%
あてはまる（n=93）	19.4%	34.4%	33.3%	12.9%	100.0%
合計（n=689）	11.9%	43.4%	36.6%	8.1%	100.0%

χ^2=26.795（df=9）　p＝.002

異性の友人が特に多いグループは、異性と話すことへの抵抗が低く、異性とコミュニケーションをとる機会も多い。この状況を活用して、「異性の友人」の中に恋人候補を見つけようとしているのだろう。また、異性の友人が特に少ないグループの中には、現状に不満を持つが故に、親しく話すことができる異性としての恋人を求める傾向が強まるのだろう。一方、「ほどほどに異性の友人がいる」ことは、それら異性との「友人関係」の中から、特定の人物との関係を、「恋人関係」に変化させること、あるいは、既存の友人グループの外で出会った、「新しい異性の友人」と親しくなることへの歯止めとなる。やや論点先取になるが、筆者は次節で「恋愛に消極的」な理由についての因子分析を行い、恋愛積極性の阻害要因として「既にできあがっている人間関係を壊したくない」（人間関係維持志向）という因子を抽出した。異性の友人・同性の友人からなる複数名の友人集団の内部にいる特定の異性、あるいは集団外で出会った別の異性を、「恋人」として特権化することは、これまで彼／彼女が所属してきた友人集団からの離脱につながりかねない。だからこそ、「ほどほどに異性の友人がいる」者で、恋愛への積極性が低下するのだろう。

3．現代大学生の恋愛事情

前節の分析で得られた知見より、現代の大学生たちの恋愛のあり方について2つの仮説が導かれる。最初の仮説（仮説1）は、「現代の大学生は、大学入学前（中学生～高校生）の段階において、既に『恋愛に積極的なグループ』と、『恋愛に消極的なグループ』に分化している。その時点において『恋愛に消極的なグループ』に所属した者は、大学生になっても恋愛に消極的であり続ける」、である。次の仮説（仮説2）は、「『恋愛に消極的なグループ』に所属した者が、そのライフコースのどこかで、アニメ・ゲームなど『おたく的』とされる趣味に没入した場合、さらに

現実の恋愛から遠ざかる」、である。

まずは、仮説2から検証してみたい。筆者は、今回使用した調査票に、恋人の有無、「おたく的」趣味への親和度、「恋愛対象として見てもらえるタイプ」かについての自己認識、異性との会話頻度、中学生時代における異性との恋愛関係の有無、恋愛に関する評価、異性とのコミュニケーションスキル、恋人を持っている友人の有無、恋人を持つ友人へのあこがれ、といった質問文を多数配置した。

これらの設問への回答をカテゴリ、対象者をオブジェクトする多重応答分析を実施した。重心座標を算出し、これをもとにカテゴリプロットを作成し、図-1を得た（読者の理解を助けるために、本図上におけるプロットのラベルは、より分かりやすいフレーズに改変している）。この図の第1、第4象限には、恋人保有群と恋愛積極群が位置している。これらの群に所属する学生は、異性との会話に緊張を覚えず、現実に異性の友人を多く持つ。恋愛に対する価値付けも肯定的である。努力によって誰もが勝ち取ることができる恋愛は、他の趣味や娯楽よりも充実し、楽しいものだとする価値観を持っている。そして、これらの学生は、周囲の友人が恋人を持っている可能性が高く、中学生時代、既に異性との恋人関係を築いていた。

一方、本図の第2、第3象限には、恋愛消極群の学生が位置している。これらの学生は、現実の人間との恋愛にはそれほど積極的ではないし、恋愛をしない生活を退屈だと考えている訳ではない。異性と話す場合には緊張を覚えるし、異性との会話する機会が少ない。中学生時代には恋人を持っておらず、自分を恋愛対象として見てもらえないタイプの人間だと位置づけている。しかも周囲の友人たちにも恋人を持っている人が少ない。

さらに、第2象限と第3象限を比較すると、先の仮説2を裏付ける傾向が見いだされる。注目すべきは、座標軸の第2象限に位置取った回答群と、第3象限に位置取った回答群の比較である。第3象限は、「おたく的趣味にくわしい」という回答を中心に、「異性から恋愛対象として見てもらえない」「恋愛より楽しい趣味や遊びがあると思う」「異性と話す時は緊張する」「恋愛に縁がない生活でもおもしろい」「努力しても恋人が見つからない人がいる」「恋人がいる友人は少ない」といった回答が集まり、1つのまとまりを構成している。ここで想起されるべきは、恋愛に関して消極的とされる大学生が、さらに2つのグループ、1）恋愛を不要不急のものと位置づけ、それから意図的に距離をとるグループ（恋愛不要群）と、2）実は他者と恋愛関係を取り結ぶことを求めているグループ（恋愛希求群）とに下位分化していることを指摘した髙坂康雅の研究である［髙坂 2011］。図-1の第3象限に集中した特性は、髙坂が指摘した「恋愛不要群」と見事に一致していた。これに対して、第2象限にある回答は「おたく的趣味にやや詳しい」「異性から恋愛対象としてあまり見てもらえない」「恋愛よりも楽しい趣味や遊びがあるとやや思う」「異性と話す時はやや緊張する」「恋愛に縁がない生活でもややおもしろい」「努力しても恋人が見つからない人がいるとやや思う」「恋人がいる友人はやや少ない」といった回答が集中していた。

昨今のわが国では、「今の若者はアニメやゲームに没入するから、現実世界での恋愛ができなくなっている」との主張がしばしばなされる［e.g.森永 2012］。しかし、図-1の第2象限と第3象限の比較をすることで、これとは逆のプロセスの存在が示唆される。中学生時代に恋人を作らな

かった人は、恋愛に対する肯定的な価値観や、異性とのコミュニケーションスキルを磨くことができず、大学生になってもその状況が続く（第2象限）。そのような大学生の一部が、そのライフコースのいずれかの時点において――中学時代かも知れないし、つい昨日のことかも知れない――いわゆる「おたく文化」とされるものに接触し、それに耽溺するようになると、「恋愛をしない自分」をむしろ積極的に肯定していく状況となり、現実の異性との恋愛行動から離れていく。「おたく的趣味」への耽溺は、確かに恋愛積極性に対する阻害要因となっているが、基本的には、既に恋愛に対して消極的になってしまった者に対してのみ作用していると考えるべきだろう。

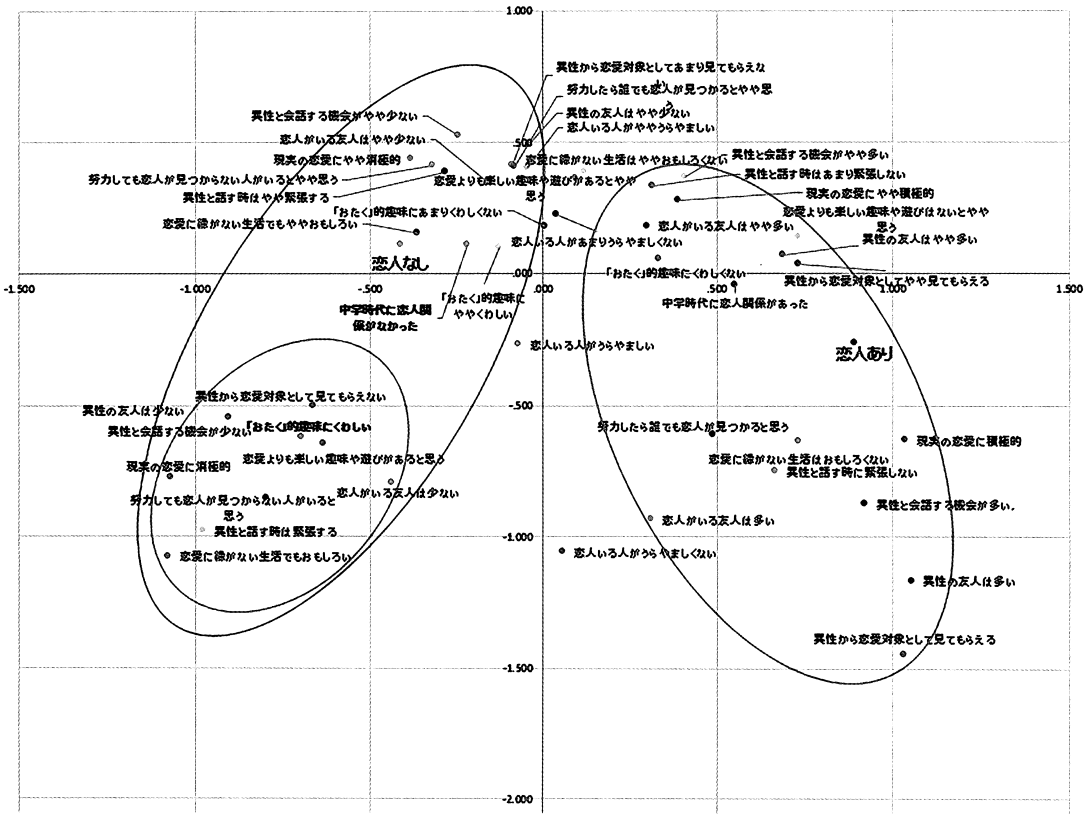

図-1：多重応答分析結果

ついで、仮説1について検討を加えたい。今回の調査では、「現在、恋人がいない人」に対して、「恋愛をしない理由」を問いかけた。16個の設問を投げかけ、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で回答させた。天井効果、フロア効果の測定、共通性の確認、解釈の明確さなどを念頭において、都合4回の因子分析を実施し、表-3のパターン行列を得た。因子抽出は最尤法を用い、Scree基準、Guttman基準をもとに因子数を3と推定。回転にはpromax法を用いた。

ここで得られた因子は、それぞれ「自分を取り巻いている人間関係の維持志向」（因子Ⅰ）、「恋

愛／異性への苦手意識」（因子Ⅱ）、「日常生活の多忙さ」（因子Ⅲ）と命名できよう。次に因子ごとの因子得点を算出し、調査対象者の中学生時代における恋愛行動、恋愛観と、恋愛消極性との関係を見ていったところ、いくつかの点で有意な連関が見いだされた。まず、中学生時代の恋愛経験については、恋愛感情を抱いたことがあった者は、抱いたことがなかった者よりも、全ての因子得点の平均値が低かった（表-4）。

表-3：因子分析結果

恋愛をしない理由	因子１	因子２	因子３
別れたら，面倒なことになりそうだから	**0.897**	-0.006	-0.082
特定の人に束縛されるのは嫌だから	**0.629**	-0.030	0.071
まわりの人びととの友人関係を壊したくないから	**0.518**	0.048	-0.010
周囲のカップルを見ていると大変そうだから	**0.478**	0.094	0.122
恋人とのつきあい方がよくわからないから	-0.063	**0.904**	0.043
恋愛感情というものがよくわからないから	0.010	**0.654**	0.073
現実の人間と会話するのは苦手だから	0.127	**0.468**	-0.082
異性との出会いや会話が少ないから	0.029	**0.425**	-0.132
勉強や就職活動で忙しいから	0.046	-0.065	**0.769**
部活／サークル・アルバイトなどで忙しいから	-0.005	-0.015	**0.756**
累積寄与率	31.779	47.532	60.498

表-4：因子得点の比較

中学生時代の恋愛経験（片思いを含む）		度数	因子得点平均値	標準偏差	t検定結果
因子１：人間関係維持志向	経験なし	137	0.221	0.875	t=3.229
	経験あり	559	-0.049	0.915	p=0.001
因子２：恋愛／異性への苦手意識	経験なし	137	0.537	0.823	t=7.866
	経験あり	559	-0.124	0.900	p＜0.001
因子３：多忙さ	経験なし	137	0.216	0.918	t=3.623
	経験あり	559	-0.050	0.846	p=0.002

中学生時代における、異性との実際的な交際経験について見る。交際経験があった者は、交際経験がなかった者よりも、全ての因子得点の平均値が低かった。さらには、「（中学生の頃は）恋愛感情というものがよくわからなかった」という設問に対する回答（あてはまる、ややあてはまる、あまりあてはまらない、あてはまらない）で回答者を4群に分けて一元配置分散分析を実施すると、中学生時代に「恋愛感情を理解していた」者ほど、因子Ⅱ（恋愛／異性への苦手意識）に関する因子得点の平均値が低くなっていた（表-5）。

ここで、因子Ⅰ～因子Ⅲの内容が、いずれも、大学生である現時点についての認識や志向性となっていることに注目したい。2節（1）の記述、及び図1で見たように、大学生は、小数の「恋人を持っている／今は恋人がいないが、恋人を作ろうと積極的に動いているグループ」（恋人保

有群+恋愛積極群）と、多数の「恋人がおらず、恋愛に対して消極的なグループ」（恋愛消極群）に分化している。そして、2節（2）で論じたように、それぞれのグループは、グループ内の人間で友人ネットワークや趣味縁のネットワークを築く傾向にあり、異なったグループに所属している者の交流は低調であった。この差異が、両グループの分化をさらに加速させているのだろう。注目すべきは、この分化が、一般的にわれわれ人間が異性に対して恋愛感情を抱きはじめるとされる中学生の時期から、既にはじまっていた点である［e.g. 宮武 1998］。かつて「異性と率直に話し合える中学生／恋愛に積極的な中学生」であった者は、そのような大学生となり、「異性との会話や恋愛に消極的であった中学生」であった者は、大学入学後も、そのような青年期を過ごし続けている。今回の調査結果によれば、恋愛に対する積極性の促進要因や阻害要因は、回答者らが恋愛感情に目覚めたであろう中学生時点において、既にかなりの程度まで領有されていた。

表-5：中学生時代の恋愛理解度と、恋愛／異性とへの苦手意識

中学生時代、恋愛感情というものがよくわからなかった	度数	因子得点の平均値	標準偏差
あてはまらない	135	-0.596	0.971
あまりあてはまらない	292	-0.167	0.793
ややあてはまる	199	0.232	0.740
あてはまる	105	0.791	0.806
全　体	731	—	0.920

分散分析結果　F（3,727）=66.233　p＜0.001

Tukey　HSD

中学生時代、恋愛感情というものがよくわからなかった		平均差	標準誤差	有意確率
あてはまらない	あまりあてはまらない	-0.429*	0.085	全て p＜0.001
	ややあてはまる	-0.828*	0.091	
	あてはまる	-1.387*	0.106	
あまりあてはまらない	あてはまらない	0.429*	0.085	
	ややあてはまる	-0.399*	0.075	
	あてはまる	-0.959*	0.093	
ややあてはまる	あてはまらない	0.828*	0.091	
	あまりあてはまらない	0.399*	0.075	
	あてはまる	-0.559*	0.099	
あてはまる	あてはまらない	1.387*	0.106	
	あまりあてはまらない	0.959*	0.093	
	ややあてはまる	0.559*	0.099	

*：0.5％未満で有意

4．結論と今後の展望

現代の大学生は、既に中学生の時期から、恋愛に対する積極性に関する促進要因や阻害要因を領有し、そのまま「恋人保有群」「恋愛積極群」「恋愛消極群」に分化している。この背後に、土井隆義［2009］が指摘した、「キャラ化する／される子どもたち」、あるいはそれを生み出す風潮を指摘することは容易であろう。調査時点において、大学生となっている人びとは、かつて土井の研究対象となった中学生や高校生の世代そのものであるからだ。土井が言う「キャラ化」の流れを「阻止」する方法を提示できない以上、恋愛への積極性に対する大学生の二極分化、「非モテ」キャラの増加、「おたく的」とされる趣味に没入することで、恋愛消極群から恋愛不要群に「進化」する大学生の増加といった状況がさらに進展していくこと、さらには1節で問題視した「恋愛離れ／恋愛に関する二極分化がもたらす社会問題／病理的現象」は、今後さらに深刻化

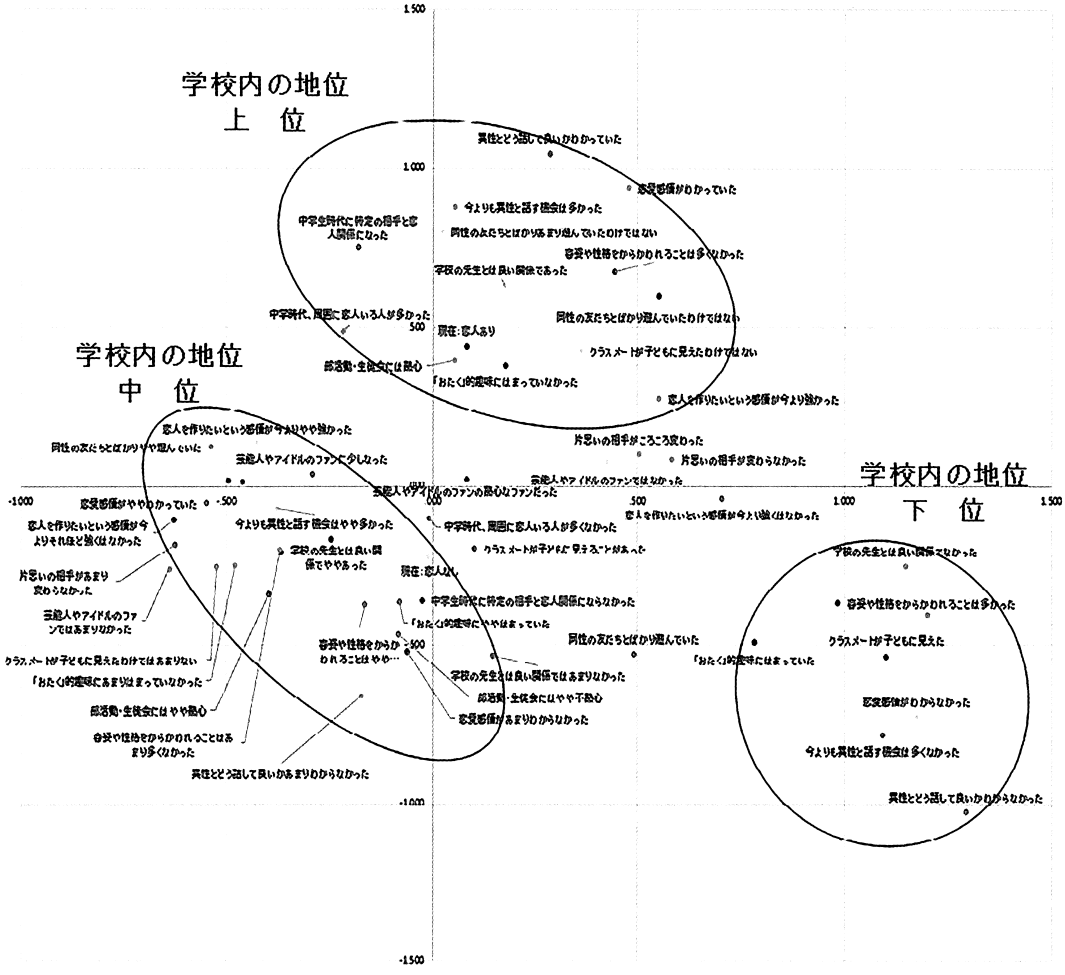

図-2：多重応答分析結果（2）

することが予想される。

今回の調査では、回答者に対して「中学生時代のあなたは、総合的に見てどんな人だったでしょうか」という質問を複数投げかけ、友人関係、恋愛感情、趣味、教師との関係、部活動への参加などを質問した。これらの質問に対する対象者の回答と、現時点における恋人の有無との対応関係を多重応答分析で分析し、図2を得た（該当する設問をカテゴリ、各対象者をオブジェクトとするカテゴリカルデータの形式に変換して分析した結果を示す。図-2上におけるラベルは、より分かりやすいフレーズに改変した）。

分析の結果、今回の対象者となった大学生たちが、きれいに3群に分かれていることが示された。留意すべきは、この3群が、本田由紀がかつて「学校内での地位」と命名し、その後「スクールカースト」として広く人口に膾炙した概念と対応していたことである［本田 2011、鈴木 2012］。学生時代に「上位」のグループにいた者だけが、大学生になった現在でも、恋愛行動を積極的に実践できている。「中位」のグループは、筆者が挙げた4グループのうち「恋愛消極群」、下位のグループは、恋愛に消極的な大学生の中に髙坂が見出した「恋愛不要群」にそれぞれ対応していた。

既に参照した本田由紀らの研究、さらには「子どもの貧困」に関する一連の研究からは、いわゆる「学校内の地位」「スクールカースト」が、学力のみならず、本人／家族が持つ資本の量（特に経済資本と文化資本）と結びついていることが示唆されている。これらの指摘が正当であるならば、今後の日本社会において、若い世代の二極分化がさらに進行する可能性が考慮される。恵まれた家庭に生まれ、中高生時代に「学校内の地位が上位であった少数の者」が、大学生時代に「恋人」を作る。本稿1節で言及した「恋愛ポジティブ幻想」などのラベリングに基づき、このグループに属する者は周囲から高く評価される。彼／彼女たちは、その評価を反省的に自己に取り入れ、実際にポジティブと評価される行動をとり、高い社会的地位や経済力を獲得し、従来型の恋愛結婚を成就させる。

しかし、それ以外の者は、逆のラベリングからはじまる軌道に乗せられ、恋愛や結婚が困難になり、否定的なラベリングを貼られ、ネガティブな自己認識を募らせていく。確かに、大学生（あるいは「若者」）という、一種のモラトリアム的な状況が許される属性や年齢を身にまとっている間は、まだ大丈夫かも知れない。現代の日本では、友人との常時接続を可能にするアーキテクチャは既に整備されており、その上で彼／彼女は、SNSでの頻繁なやりとりに代表されるような「充実した友人関係」を構築しているからだ。しかし、彼／彼女たちが、結婚や（特に女性が）出産を考えざるを得ない年齢に達した時はどうだろうか。2016年現在、「恋活」「婚活」といった商業的イベントが隆盛を極めている。しかし、彼／彼女らが歩んできたライフコースや、そのなかではぐくんできたメンタリティから考えると、こちらの側にいる人びとが、これらのイベントに参加することは、むしろストレスを受け、フラストレーションを高めるを原因となりはしないか。それへの適応機制として、犯罪や社会的不適応といった病理現象が多発することも想定されよう[(4)]。

筆者は現時点において、この問題に対する決定的な処方箋を持ち合わせていない。しかし、今

回の研究を通し、「若者の恋愛離れに関する研究」は、「キャラ化する／される時代」「非婚社会」「ロマンティック・ラブ・イデオロギーが横溢する中で、恋愛できる若者が減っているディレンマ状況」における、新たな「文化的再生産論」と連続する可能性が見出された。こちらの分野からのアプローチも含めて、議論をさらに深めていきたい。

注

（1）恋人保有群、恋人非保有群、恋愛積極群、恋愛消極群の関係性を整理しておきたい。現状における「恋人の有無」で、対象者は、保有群と非保有群に分割される。また、現在「恋人」を持たない対象者は、「恋愛に対する積極性」において、積極群と消極群に分割されている。ただし、これら2つの分割線にはかなりの連関が存在している。一般的に言って、恋愛に対する積極性の高さは、恋人を作る必要条件となりえるからだ。ただし、本来は消極的であった人間が、「押し切られて／相手の熱意に根負けして」恋人関係を取り結んだ／維持している場合も少なからずあるだろう。恋愛積極群の中に、恋人保有群と恋人非保有群が存在する可能性は高いが、恋人保有群全員が恋愛積極群であるとは言い切れないだろう。すなわち、恋人保有群と非保有群は相互に排他的である。恋愛積極群と消極群も相互に排他的である。恋人保有群の多くは恋愛積極群に包摂されているものが、両者は完全に一致しているわけではない。

（2）本稿は［中村編 2014］で展開された各種の議論のうち、「恋愛への積極性」に関する議論を中心に再構築したものである。執筆にあたり、全ての分析をもう一度やり直した。紙数の関係で割愛したが、図1、図2を作成した数値は、それぞれ同書pp11-12、pp37-38に掲載している。

（3）調査票の質問文は、すべて「異性の恋人……」「異性から……」といった表現を用いている。また、調査にあたっては「調査の趣旨に賛同しない／できない場合は全面的に回答を拒否できる」「（賛同した場合でも）答えたくない質問には回答しなくて良い」との説明を、口頭及び、調査票の表紙の文章で回答者に通知した。これらの手続きによって、LGBTの者に対する配慮は尽くせたものと考えている。

（4）髙坂［2011］は、恋人を欲しいと思わない青年に、1）自己の不変性および時間的な連続性の感覚が低い傾向、2）自分の考えを最善であると考え、他者からの意見を受け入れない傾向を見出している。これらの傾向は，心理学的には「自我発達の未熟さ」と措定される。

文献

土井隆義 2009『キャラ化する／される子どもたち――排除型社会における新たな人間像』岩波書店.

深澤真紀 2008「草食男子」『non-no』2008年4月号.

本田由紀 2011『学校の「空気」』岩波書店.

犬山紙子・峰なゆか 2012『邪道モテ！――オンナの王道をゆけない女子のための新・モテ論』

宝島社.
石川茜恵 2013「青年期における過去のとらえ方の構造——過去のとらえ方尺度の作成と妥当性の検討」『青年心理学研究』24-2：165-181.
返田健 1986『青年期の心理』教育出版.
国立社会保障・人口問題研究所 2011「第14回出生動向基本調査——結婚と出産に関する全国調査・独身者調査の結果概要」
http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.pdf（2016年7月1日最終閲覧）.
髙坂康雅 2011「“恋人を欲しいと思わない青年”の心理的特徴の検討」『青年心理学研究』vol.23-2：147-158.
——— 2013「青年期における“恋人を欲しいと思わない”理由と自我発達との関連」『発達心理学研究』vol.24-3：284-294.
宮武朗子 1998「異性交際の始まり（中学校）」『現代のエスプリ』No.368：29-39.
森岡正博 2008『草食系男子の恋愛学』メディアファクトリー.
森永卓郎 2012「若者の恋愛離れ——生身女性は自由きかずアニメやゲームに走る」『SAPIO』2012年9月19日号.
中村晋介（編）2014『大学生の友人関係・恋愛観に関する調査』福岡県立大学人間社会学部公共社会学科.
人間力戦略研究会 2003『人間力戦略研究会報告書』
http://www5.cao.go.jp/keizai1/2004/ningenryoku/0410houkoku.pdf（2016年7月1日最終閲覧）.
鈴木翔 2012『教室内（スクール）カースト』光文社.
谷本奈穂 2008『恋愛の社会学——「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社.
若尾良徳 2003「日本の若者にみられる 2つの恋愛幻想——恋人がいる人の割合の誤った推測と恋人がいる人へのポジティブなイメージ」『東京都立大学心理学研究』vol.13：9-16.
——— 2014「恋愛に関する心理学研究の展望——異性交際から疎外された若者へのライフコースからのアプローチ」『浜松学院大学論集』No.10：59-77.